

## - 巻頭言 -

一般社団法人日本社会福祉学会 副会長 湯澤 直美(立教大学)

地震・台風・豪雨をはじめとする自然災害が多発する現代社会に、COVID-19(新型コロナウイルス感染症)の世界的大流行(パンデミック)が襲い、グローバルな危機がもたらされてから、まもなく1年半を迎えようとしています。COVID-19はいのちを直撃し、さらに、暮らし、雇用、経済をはじめ、社会のあらゆる側面に甚大な影響を与えており、「コロナ禍」と称される事態が現在も続いています。そのような惨禍のなかで、さらに自然災害が多発する現代社会は、あらゆる地域が多重的な被災地となりうる現実を突きつけています。さらに、日本各地に思いを馳せると、放射能汚染により「被爆の森」と称されるようになった大地、進行を妨げられる戦死者の遺骨収集をはじめとして、この大地にいかん生態系や人々の魂が刻印されているのか、考えさせられます。

一方、溢れるコロナ報道・オリンピック報道のもとで、東日本大震災からの復興もいまだ途上である事実や、コロナ禍でのオリンピック開催により「路上生活」からも行き場を失う人々の存在がかき消されてしまう日常に、危機感を覚えます。「いのち」のリスクと「死」がこれほどまでに身近に迫っている日常が常態化している現代において、次世代を生きる子どもや若者にどう大人社会が向き合っているのか、大きな命題が突きつけられています。

このような時代状況にあって、今こそ、学術の真価が問われ、また、その真価を発揮していくときであると実感します。コロナ・パンデミックの時代状況にあって、生起している実態とその問題構造を可視化すること、既存または新規の制度・政策の効果を検証すること、後世に向けて記録やデータを保存していくことなど、取り組むべき研究課題が多くあります。

エイズ・サース・エボラ出血熱、そしてCOVID-19といった新興のウイルス感染症は、既存の国際保健枠組みの限界を人類に認識させる契機となり、「グローバル・ヘルス」という国境を超える協力体制を築く改革が行われてきました(詫摩:2020)。しかし、それでもなお、感染症の脅威や影響力は、社会的不平等を背景に人々に格差をもたらし、あるいは、その影響力ゆえに社会的不平等を拡大していきます。アメリカの状況を米疾病管理予防センターのデータをもとに紹介した鈴木和子は、被害状況は年齢にかかわらずネイティブ・アメリカン(インディアン)、黒人やヒスパニック(中南米系)などの入院率や死亡率が、非ヒスパニック系の白人(以下「白人」)より高いことを指摘しています。例えば、年齢調整入院率では、ネイティブ・アメリカンや非ヒスパニック系の黒人は、それぞれ白人の約5.8倍、4.7倍、4.6倍も高くなっており、コロナ禍の米国の人種間格差は深刻です(鈴木:2020)。

そのような背景には、適切な医療へのアクセスの格差やそれに伴う基礎疾患の保有率の高さ、エッセンシャルワーカーや接客業従事者が多いといった職業的影響や賃金の格差、住環境の格差、情報格差などの複合的な要因があると、鈴木は指摘しています。また、COVID-19が感染爆発したニューヨーク市の状況を論じた牧野百恵は、ニューヨーク市が自らのウェブサイト日々更新している人種ごとの感染者数・死者数などのデータをもとに、感染率と人種・所得・教育水準の関係を分析しています。その結果、教育水準を考慮すると人種による感染率の統計的な違いがなくなり、とくに大学卒であると感染率が大幅に下がることから、COVID-19による健康被害においても、教育格差が顕著

な影響をもたらすと指摘しています(牧野:2020)。

このようにみると、COVID-19がもたらす健康被害の格差や、労働・経済・生活への影響の格差は、国家や地域、人種やジェンダーなど、様々な視角からエビデンスを蓄積していく必要があるでしょう。感染症による災害状況ともいえる「コロナ禍」のもとで、重層化して埋め込まれている社会的不平等がいかなる態様に変容していくのか、日本においても、社会福祉学のアプローチからの知見を根気強く積み上げていく必要があります。

その際、研究力に求められるひとつとして、「注目格差」というポイントがあるように思います。人類の感染症との闘いの歴史を国際政治の視点から論じた詫摩佳代は、基本的な人権のひとつである「健康への権利」を確保するうえで大きな問題が、「注目の格差」であると指摘しています。たとえば、途上国で猛威を振るい大きな課題となっているにもかかわらず、国際的注目を集めていない「顧みられない熱帯病」と呼ばれる疾患があります。詫摩は、「顧みられない熱帯病」は最貧困層が貧困から抜け出せない原因にもなっており、貧困を助長するものとして、慢性的貧困と深い関係にあると論じています(詫摩:2020)。

これは、「注目の格差」の一例ですが、COVID-19の持続的かつ甚大な影響力のなかで、何にこそ注目をしていく必要があるのか、研究者それぞれの専門的視角から多角的にアプローチし、叡智を集めていきたいと思います。そのためにも、学会という組織が、ひとりひとりの研究者をエンパワーし、また、そこで生み出される研究の知見が、ひとりひとりの市民をエンパワーしていけるよう、共に一歩一歩、歩みを進めてまいりましょう。

#### 【引用・参考文献】

牧野百恵(2020)「ニューヨーク市で感染爆発したCOVID-19と人種、所得・教育水準」『IDE スクエア -- 海外研究員レポート』日本貿易振興機構アジア経済研究所,pp1-9.

鈴木和子(2020)「コロナ禍の米国—人種間格差と反人種差別運動」『労働調査』2021年7月号,労働調査協議会,pp4-10.

詫摩佳代(2020)『人類と病—国際政治から見る感染症と健康格差』中公新書